

國學院大學學術情報リポジトリ

A study on the formation of the Enkyo version Heike monogatari northern battle article

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Ohya, Sadanori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000145

延慶本『平家物語』

北国合戦記事の形成に関する一考察

大谷貞徳

一、はじめに

『平家物語』の北国合戦記事は、諸本間で異同が激しいことで知られる。諸本によつては北国在住の武士等が具体的に活躍する姿を描いている。記事内容が具体的なのは、その素材として在地の伝承が深く関わっており、それらをそれぞれの諸本が取り込んで記事が形成されたと考えられていた¹⁾。さらに、諸本の制作に在地の者たちの参与を想定することもあった。しかし、そうした考えに疑問を投げかけたのが松尾葦江氏である。

松尾氏は、延慶本と長門本を比較し、北国合戦記事の形成について「北国合戦記事の大半は、一部始終のまとまったかたちで素材があつたわけではなく、断片的な挿話や、人名と簡単な消息等から構成されたものと思われる」とし、「合戦記事の具象性の何がしかは、素材そのものに起因しているのでなく、編集・創作を混えて意図的に構成されたものであろう。」と指摘された²⁾。合戦記事における具体的な描写は素材そのものによると考えられることが多かったが、松尾氏の指摘により、これまでの考えを改めさせることとなった。

二、問題の所在

ところで、諸本で描かれている北国合戦記事に目を向けてみると『平家物語』諸本中、延慶本の北国合戦記事内に不自然な箇所がある。まず、その箇所を挙げる⁽³⁾。

Ⅰ (延慶本) サルホドニ、安宅ノ勢、軍二手負タリシ石黒ノ太郎忠直モ今日ウイダチシテ、馬ニカキノセラレ

テ、般若野陣へ参リタリケリ。ヨリシモ同国ノ住人 中村三郎忠綱、ムクタノ荒次郎村高、参合候ケレバ、

(第三末・義仲白山進願書事付兼平与盛俊合戦事)

Ⅱ (延慶本) 同二日、志雄軍、十郎藏人行家負色ニナリタリケ

レバ、越中前司盛俊、勝二乗テ責戦フ。木曾社浪山ノ軍ニ打勝テ、五万騎ノ勢ニテ志雄坂へ馳向テ、安高ノ湊ヲ渡サムトスルニ、ハシヲヒカレテ、河ハ深シ、ワタスニ不^レ及シテ、イキツギイテ、鞍置馬ニ手繩ムスビテ、カイカケく七八疋

追渡ス。平家ノ勢此ヲ見テ、「源氏落ナムトスルニコソ。コ、ニ馬落タリ」ト申テ、我トラムくトシケルヲ、木曾是ヲミテ、「河ハアサカリケリ。渡セヤく」ト云テ、

(第三末・志雄合戦事)

Ⅰは、義仲が般若野に陣を敷いている所に北国の武士が参陣した場面である。傍線部の「石黒ノ太郎忠直」は、「軍二手負」ついていたが、「今日ウイダチシテ」義仲の許に参陣したとする。これにより、石黒太郎が参陣したいきさつがわかる。一方、「中村三郎忠綱、ムクタノ荒次郎村高」については、「ヨリシモ」「参合」と記されるだけである。こうしたことから石黒太郎の扱いが、彼らとは一線を画しているといえる。しかし、延慶本では安宅の勢が平家勢と戦い、そこで石黒太郎が負傷したとする合戦を描いていない。話の連続性からすると不自然な内容となっている。

Ⅱは、源氏勢が砺波山合戦で勝利をした後に安宅湊に至り渡河する場面である。この箇所を詳細にみると、追い入れた馬が平家の陣へ駆け入ったのか否かがわかりにくい。もし陣内へ駆け入ったならば、平家の人々は自軍の陣内で馬を奪い合っ

たということになるが、そうでないとするならば、平家の人々は河の中で奪い合ったということになる。このことは、義仲が何を見て「河ハアサカリケリ」と判断したのかという問題とつながる。要するに、馬が河を渡り平家陣内へ駆け入った様子を見て判断したのか、それとも平家の人々が河の中に入り馬を奪い合う様子を見て判断したのかということである。後者のようには現实的ではなさそうだが、では、馬が河を渡れば水深は浅いと判断できるのだろうか。もちろん、義仲が「河ハアサカリケリ」と発言しているため、馬の背を浸すほどの水深ではなかったと推測はできるかもしれない。しかし、十分に説明されているとはいえず、水深が浅かったことがわかる表現があつてしかるべきではないか。そもそも何のために「鞍置馬」を用意したかが延慶本本文からはよくわからない。⁵ いずれにしても本文に不備があるといえるだろう。それゆえ、この箇所には不自然な印象を抱くのである。本稿では、延慶本の不自然な表現に注目し、延慶本の北国合戦記事における性質を考究することを目指す。

三、延慶本の後出性

(1) 延慶本の不自然な箇所 その1

延慶本の表現が不自然になってしまった原因を明らかにするために、長門本・源平盛衰記（以下、盛衰記と略す）の本文と比較していく。延慶本・長門本・盛衰記は、読み本系三本と称されるほどに近似性を示すことがあり、これらと比較することと一段遡った本文の様子を窺える可能性が高いのである。⁶ また、長門本・盛衰記との比較によって、両本との位相差も明確となるだろう。

次に挙げた表は延慶本の記事を基に記事内容を項目化し、長門本・盛衰記の本文がどのようなようになっていくかも合わせて示したものである。表を見ると、ある箇所では延慶本と長門本とが近似性を示すが、別の箇所では、延慶本と盛衰記が近似性を示すなど複雑な関係にあることがわかる。

まず①について検討していく。延慶本には「安宅勢」が負傷した合戦について描かれていないが、長門本・盛衰記にはある（表、2）。

【表】

- | | |
|---|---------------------------|
| 1 | 火打合戦 |
| ※ | 盛衰記、源氏勢が後退しながら所々で合戦する内容あり |
| 2 | 源氏勢、安宅で平家勢と合戦する |
| ※ | 長門本、斉明威義師による火牛の計 |
| 3 | 白山願書 |
| ※ | 盛衰記、5の後に白山縁起記事とともにあり |
| 4 | 平家、林・富樫を追い落とす |
| 5 | 般若野合戦 |
| 6 | 平家の軍手配 |
| 7 | 義仲の軍手配 |
| ※ | 長門本、宮崎太郎の進言あり |
| 8 | 宣旨の状 |

- | | |
|----|-----------------|
| 9 | 義仲の計略 |
| 10 | 平家・源氏それぞれの占い |
| 11 | 義仲、在地武士等に意見を請う |
| ※ | 長門本、7の後にあり |
| 12 | 新八幡願書 |
| 13 | 砺波山合戦 |
| ※ | 盛衰記、義仲による火牛の計あり |
| 14 | 安宅湊での合戦 |
| 15 | 篠原合戦 |

※ 傍線部：延慶本の独自項目

波線部：延慶本にはなく、長門本・盛衰記が共有している項目

破線部：長門本にはなく、延慶本・盛衰記が共有している項目

二重傍線：盛衰記にはなく、延慶本・長門本が共有している項目

まずは、長門本と盛衰記がどのように安宅合戦を描いているか確認する。

木曾義仲に与した北国の武士等は、齋明威義師の裏切りにより火打城を追い落とされ安宅に布陣する。

〔長門本〕平家の先陣、越中前司盛俊、五千余騎にて、安高のみなどへうち入て、「わたせや〜」と下知しつ、我をとらしとわたしけり。加賀の国の住人、とかせの太郎、越中国住人宮崎太郎二人、はせかへりて、「一人もわたすな。みな河にいはめよ、ものとも」とて、河中へおちふさかりてた、かひけり。^①とかせの太郎は、越中前司盛俊かはなつ矢に、くひのほねいさせて、河中にまさかさまにおちにけり。^②宮崎太郎も、うちかふとをうしろへいぬかれて、河中におちたりけるを、郎等四五人よて、かたにかけてあかりたる。河はたにをきたれば、わつかにめはかりはたらきけり。郎等共、「今はちからをよはず。かたきはすてにちからつき候。人手にかけまいらせ候はんよりは、御くひを給て、本国にかへりて、女房に見せまいらせむ」といひければ、一門のもの

〔盛衰記〕

も五十余人、さしあつまりて、「いかてか、かはゆく、めのはたらく程の人のくひをは、かくへき。われらいまは、いきてもなにかはせん。しなんまでふせき矢はいむするぞ。あをたにかひてゆけ」とて、あをたにか、せて先にたて、^④一門のものとも五十余人、ふせきやいてた、かひければ、平家の大将、やかてもつ、かす、事故なく、越中国へそこえにける。宮崎は、宿所へかき入て、それにてくすしをつけて医療するほとに、療治にかなひて、廿日といふに療しやめつ。かしこくそくひをか、さりける。
(卷第十三・北国所々合戦付火牛計事)

源氏はヲ見テ、「アハヤ平家ハ渚ヲ渡ハ。陸へ上立ズシテ、河中ニ射浸ヨ者共」トテ、^A一千余騎轡並テ引取指詰散々ニ射。平家ノ先陣三百余騎、河中ニ被^B射浸^Cテ海ノ中へ被^D押流。

^B水卷ノ四郎安高、此様ヲ見テ、父子六騎勇ヲメキテ、馬ヲ水ニ打入テ散々ニ戦フ。飛驒守景家が一党ノ中ニ被^C取籠、三騎討レテ、三騎ハ手負テ引退。

^C石黒太郎兄弟五騎、馬ノ鼻ヲナラベテ、太腹際打

入テ、散々ニ射。越中前司盛俊、大ノ中指取テ番つが能引テ兵ひやくう下射、其矢、石黒太郎ニシタ、カニ中。
 暫シモタマラズ、水ノ上ニザブト落。

^D 舍弟福満五郎打寄テ、水中ヨリ引上テ肩ニ引懸、
 朴坂越二石黒ニ帰テ、灸治ヨクシテ、又十日バカリ
 有テ、都浪ノ軍ニ値あひタリケルコソ、ユ、シキ剛者
 トハ覚タレ。(卷第二十八・北国所々合戦)

長門本と盛衰記を比較してみると合戦の描き方に異なる点が見える。長門本では、富樫・宮崎太郎が河中で盛俊と交戦するが、それぞれ盛俊の放つ矢に倒れるさまが描かれている(傍線部①・②)。一方、盛衰記では押し寄せる平家勢を迎え撃つ源氏勢(傍線部A)、安高と景家の戦鬪(傍線部B)、石黒が盛俊の矢に倒れる(傍線部C)の様子それぞれ描かれている。また、長門本では宮崎太郎が射落とされた後に郎等らによる談義が描かれ、その後一門の者たちが防ぎ矢をし越中国で療治できたとするが(傍線部④)、盛衰記では談義の場面はなく、石黒太郎の弟福満五郎が兄を肩に担いで石黒に帰り、兄は治療を受けたとしている(傍線部D)。

それぞれが独自の内容になっていると指摘できるが、話の展

開に注目すると共通点もある。すなわち、北国の武士等が平家勢と交戦し盛俊の放った矢に倒れるが、味方によって帰国させられ治療をうけたという点である。

ところで、延慶本の□(表、11)に対応する箇所は長門本も有している。

〔長門本〕越中国住人に、木曾に付中にも、宮崎太郎は、安高のみなどのいくさに内かふとをいさせて、前後不覚なりけるを、あをたにかきて、越中国へこえて、宮崎にていたはりけるに、廿日といふに、疵いえぬ。
 うひたちによるひきて、木曾とのへまいりたりければ、木曾、ことにこれをかむし給ふ。

(卷第十三・源氏軍配分事)

この箇所について、砂川博氏は、長門本の本文は「延慶本の類の宮崎佐美太郎、石黒忠直の事跡を宮崎のそれに合一化させたものであらう」と指摘している⁸⁾。しかし、延慶本の「軍ニ手負タリシ石黒ノ太郎忠直」が「馬ニカキノセラレ」参陣したとある箇所は、長門本や盛衰記に描かれている安宅合戦の内容があることで初めて意味をなすのではないだろうか。安宅合戦に

おいて深手を負った石黒（長門本では宮崎）が「馬ニカキノセラレ」た状態で義仲の許に参陣する。だからこそ義仲は在地の武士に助言を請うことになるのだ。

さらに、延慶本には宣旨状と吉凶占いの記事がある。この箇所に関して松尾葦江氏は、「宣旨や吉凶占いの記事を挿入したために俱利伽羅戦場の手配記事が分断されたのであろう。」と指摘されている。宣旨や吉凶占いの記事は、延慶本にしかないことを踏まえると、延慶本がこれらの記事を新たに取り込んだ可能性が高い。延慶本の本文は、長門本や盛衰記にあるような安宅合戦が描かれていた本文から独自に改変の手を加えたといえそうだと。

② 延慶本の不自然な箇所 その2

次にⅢの箇所を検討していく。ここでもまずは長門本・盛衰記の本文の内容から確認する。

〈長門本〉さる程に、きそ、あたかのみなとへをしよせて見給

へは、はしをひかれたり。わたすへきやうなかりけり。宮崎太郎か申けるは、「^①このみなとには、やうの候ぞ。大なみたちては、いさこうちよせられて、

〈盛衰記〉

みなとあさくなり、大水まされば、いさこちなかされて、河ふかくなり候也。ふかきあさきほとを、見候へし」とて、^②かひたる馬四五ひきによきくらをきて、たつなむすひてをひわたす。あふみもぬらさて、むかへのはたにかきあかる。きそ、これを見て、「あれ見よ、とのほら。よかめるは。ぬしここ、ろへてたつなかひくり、すかりか、へて、馬にちからをつけて一あをりあをらは、ものでもあるまし。わたせやく」との給ひければ、これをき、樋口、今井、楯、根井、大室、小室をはしめとして五百よきにて、さとわたす。さきにをひわたす四五疋、へいけのちんのまへにおとりてきてきたり。へいけのさふらひとも、「あは、けんしは。みなおつるは。くらをき馬いてきたり。我とらん」とうはひあふところに、（巻第十四・安高湊合戦事）

六月一日ハ、源氏、俱利伽羅・志雄山、追手・搦手ノ大將軍一二成、五万余騎引具シテ、安宅ノ渡^{わた}ニ押寄タリ。平家橋ヲ引タリ、水ハ濁テ底見エズ。源氏モサウナク不渡シテ、北ノ耳^{はた}ニ引ヘタリ。越中

国住人石黒・宮崎申ケルハ、「^A我等先ニ城構テ待シ
時ハ、平家ハ渚ヲコソ渡テ候シカバ、以^ニ案内者^一渚
ノ瀬踏ヲシテ御覽候ヘカシ」ト申ケレバ、木曾ハ加
賀国住人林六郎ヲ召テ、「汝ハ当国住人也、河ノ案
内知タルラン。瀬歩^{せがみ}仕レ^トト仰ケル。光明仰承テ、
^B能馬十疋ソロヘ、手綱結懸テ追入タリ。鞍爪・力
革ヲバ過ザリケリ。木曾、「河ハ浅カリケリ。渡セ
者共々々」ト下知シケレバ、信濃ニハ今井・樋口・
楯・根井・宇野・望月・諏方上下、越中ニハ石黒・
宮崎・向田・水卷・南保・高楯・福田・賀茂鳥等、
加賀国ニハ林・富樫・下田・倉光等五百余騎、曳音^{えいごゑ}
出シテ、打浸々々ザト渡シ、南ノ陸ニ引ヘタリ。瀬
歩ノ馬共平家ノ陣ニ馳入タリケレバ、「源氏ガ落ル
ヤラン、鞍置馬共迷来レリ。我取テノラン」ト
面々ニ追歩。

(卷第二十九・平家落上所々軍)

長門本では、宮崎太郎が安宅湊の特性について説明し(傍線部①)その後、瀬踏みを行っている(傍線部②)。一方、盛衰記では石黒・宮崎は義仲に対して、以前平家勢と安宅湊で合戦

した際に平家が渚を渡ってきたので「案内者」に瀬踏みをさせるよう進言する(傍線部A)。義仲はそれを受け、林に瀬踏みを行わせる(傍線部B)。それぞれ異なる内容になっているが、瀬踏みをすることで水かさが浅いことを知るといふ話の展開は一致しているといえよう。

ここで、延慶本の「源氏落ナムトスルニコソ。コ、ニ馬落タリ」ト申テ、我トラムトシケルヲ」という本文に注目すると、長門本・盛衰記にも同様の表現があることがわかる(波線部)。長門本・盛衰記では、瀬踏みのために使用した馬が平家の陣へ駆け入り、それを見た平家武士の発言内容となっている。延慶本では、鞍を置いた馬によって水深がわかるような表現がなく、平家の陣内へ駆け入ったということも書かれていないため、わかりにくい内容となっているのだ。延慶本の本文は、長門本や盛衰記にあるような本文に手を加え、その結果として不自然な内容になったと推測される。

以上のことから、I・IIの箇所は長門本や盛衰記に比して後出性を示す箇所だといえるのではないか。

四、北国合戦記事の意味と延慶本の意図

延慶本は、長門本や盛衰記にあるような記事を基に改編を行ったことが想定されたが、では一体何を意図して改編の手を加えたのであろうか。そのことを明らかにするために、そもそも北国合戦記事とはどのようなことに眼目がある記事なのか確認しておくことにする。

平家は義仲が信濃国で挙兵し、横田河原で城氏に勝利したことを伝え聞く。その後、義仲追討のために北陸道を北上していき、次々に勝利を収めていった。一方、義仲は自身に与する源氏勢が火打合戦で敗れたことを知り、急ぎ合流する。砺波山合戦を目前にして、

〔延慶本〕 木曾申ケルハ、「聞ガ如ハ平家多勢ナリ。柳原ノ広

ミヘ打出ル物ナラバ、馳合ノ合戦ニテ有ベシ。馳合ノ戦ハ勢ノ多少ニヨル事ナレバ、大勢ノ中ニカケラレテ悪カルベシ。敵ヲ山ニコメテ、日晚^{ふゆ}テ後、栗柄ガ谷ノ巖石ニ向ケテ追落バヤト思也。義仲先忿^{ちか}テ、黒坂口ニ陣ヲ取ベシ。敵向タリトミバ、『此山、四

方巖石ナレバ、左右ナク敵ヨモヨセジ。イザ馬ノ足休ム」トテ、砒浪ノ猿ノ馬場ニ下居テ休ムズル。其ノ後ハ搦手ヲマワシテ、谷ヘ向テ追懸ヨ」ト申テ、

※ 長門本・盛衰記も同様

と、義仲は正面切つての戦になつては小勢の自軍に勝ち目がなから山中に平家勢を足止めして、日が暮れてから倶利伽羅谷へ追い落とす作戦を立てる。この後、平家の大軍は義仲の術中にはまり、倶利伽羅谷へ追い落とされることになる。義仲率いる源氏勢は、義仲の策略によつて平家勢を追い落とすことが出来たのだ。北国合戦記事とは小勢の義仲勢が、大軍の平家を破ることができた勝因を描くことに眼目がある記事といえそうである^⑩。

諸本ともに、源氏勢が大軍の平家に勝利することが出来た理由の一つに計略を立てた義仲の能力を挙げているようだが、この他にも、義仲勢が平家の大軍に勝利した要因として、①神仏による助力②北国武士等の協力が挙げられるようだ。まずは①について確認しておく。

義仲は、自分に味方する北国在住の武士等が火打合戦で敗れ

たことを聞き、急行する。その途上で白山へ願書を奉納し、その中で白山権現の助力を得て平家を討ちたいと願う。義仲の願いが聞き届けられたことは、砥波山合戦で平家勢を谷底へ追いつ落とした後に示されている。

〈延慶本〉 木曾カヤウニ平家ノ大勢ヲセメヲトシテ、黒坂ノ手

向ニ弓杖ツキテ引ヘタル所口ニ、平家ハ七重リテウメタル谷ノ中ヨリ、俄ニ火焰燃アガル。木曾大ニ驚テ、郎等ヲ遣ハシテコレヲ見スルニ、金剣ノ宮ノ御神宝ニテゾワタラセ給ケル。金剣宮ト申ハ、白山ノ劍ノ宮ノ御事也。木曾ムマヨリヲリ、カプトラスギテ、三度是ヲ拜シ奉テ、「此軍ハ義仲ガ力ノ及ブ所ニテハアラザリケリ。白山権現ノ御計ニシテ、平家ノ勢ハ減ニケルニコソ。劍ノ宮ハ何レノ方ニアタリテワタラセ給フヤラム。御悦申サム」トテ、
(第三末・新八幡宮願書事付俱利伽羅谷大死事并死人ノ中ニ神宝現ル事)

※ 長門本・盛衰記も同様

平家との戦いの後、谷の中から火の手が上がった。これを見

た義仲は、白山権現のおかげで平家に勝利できたと発言している(傍線部)。義仲自身が平家に勝利した要因として白山権現の助力によると自覚しているのである。^①

さらに、義仲は砥波山合戦の前に新八幡宮にも願書を奉納している。奉納する直前と直後の本文を挙げる。

〈延慶本〉

木曾ウレシク思テ、木曾手書ニ木曾大夫覚明ト云者ノ有ケルヲヨビテ云ケルハ、「義仲、幸ニ当国新八幡宮ノ御宝前ニ近付奉リテ、合戦ヲ遂ムトス。①今度ノ軍ニハ疑ナク勝ヌト覚ルゾ。且ハ後代ノ為、且ハ当時ノ祈ノ為ニ、願書ヲ一筆書テマイラセバヤト思フハ、イカゞアルベキ」ト云ケレバ、

(第三末・義仲白山進願書事 付兼平与盛俊合戦事)

〈延慶本〉

此願書二十三騎ノ表矢ヲ拔テ、雨ノ降ケルニ、箕キタル男ノ簀ノ下ニ隠シ持セテ、大菩薩ノ社壇へ献ル^{たてまつ}処ニ、タノモシキ事ハ、八幡大菩薩、其二心ナキ心ザシヲヤ鑑^{かがみ}給ケム、^②霊鳩天ヨリ飛ビ来テ、白旗ノ上ニ翻^{へんぱん}翻ス。

(第三末・新八幡宮願書事付俱利伽羅谷大死事并死

人ノ中ニ神宝現ル事)

※ 長門本・盛衰記も同様

義仲は平家との戦闘の前に自身の勝利を予見しており(傍線部①)、願書を奉納した直後には八幡神の使いである鳩が源氏の旗の上を飛んでいる(傍線部②)。このことは義仲の願いが納受されたことを意味し、八幡神による義仲の勝利の保証を示す。白山権現による助力だけではなく、源氏の氏神である八幡神による勝利の保証をもあわせて描き、神仏によつて勝利がもたらされたことを示している。

次に②についてであるが、このことは読み本系三本の中でも特に相違がある。

長門本と盛衰記では、前節までで確認したとおり、義仲と合流する前に北国武士等だけで平家勢と安宅湊での合戦を描いていた。その後、義仲と合流し俱利伽羅谷へ平家勢を追い落とし、安宅湊まで攻め上った。これらは、長門本・盛衰記中では、関連性がある内容として描き出されているのである。湊を前に橋が引かれ義仲勢は足止めされたところで宮崎太郎等が瀬踏みをするよう進言するわけだが、前の合戦で安宅湊に陣を敷き平家と合戦した経験がある者たちだからこそ、湊の様子を

知っていたと理解できるのだ。要するに、宮崎太郎等は瀬踏みをするように進言する者としてふさわしい人物として描かれているのである。

一方、延慶本では北国武士等と平家勢との安宅合戦を描かず、砺波山合戦後に安宅湊を渡る場面でも北国武士等の活躍を描かない。つまり、長門本・盛衰記のように関連性のある記事構成を取っていないことになる。延慶本は、関連性のあつた構成を崩したのである。安宅合戦を描かないことと安宅湊を渡す場面で北国武士の活躍を描かないことは、通底しているのだろう。

では、その意図とは何か。ここで、義仲の持つ能力によつて大軍の平家に勝利することができたと描き出している点に注目する。延慶本が安宅合戦での北国在住の武士等の活躍を描かない理由は、平家勢を追い落とすことができ最大の要因を義仲その人に集約させて描き出そうとする意図が働いたためと考えられないだろうか。もちろん、砺波山合戦の直前で北国武士等による進言があるため、記事全体に亘つて徹底されているわけではない。しかし、長門本・盛衰記が意図した記事構成を崩すことで、北国武士の活躍が少なくなり、より義仲の活躍が目立つことになる¹³⁾。このことに気が付くと、安宅湊で延慶本の本文

が不自然な内容になっていたのは、他本とは異なる義仲の計略を描き出し、状況を打開していく義仲の姿を描き出そうとしたように思われてくる。ただし、その意図とは異なり、改変の不手際として現在のような形になってしまったのだらう。

四 おわりに

延慶本では、義仲が安宅湊を渡すところで長門本や盛衰記のように北国在住の武士の活躍を描いていなかった。そこに義仲に集約させて記事を構成しようとした延慶本の意図があったと指摘したが、そのことは他の諸本の様相を見ることで理解される。

例えば、盛衰記では、北国武士らは、義仲と合流する前の安宅合戦、合流後に安宅湊に渡る場面の両方で登場し、具体的な活躍を見せるが、砥波山合戦の前では、延慶本や長門本のようには北国在住の武士が進言する姿は描かないのである。盛衰記では、兵の配置から作戦指示に至るまで義仲一人が采配したと描くことで、砥波山合戦を義仲の智謀によって勝利することができたとする点に重きを置いて描き出そうとしているのである。北国合戦記事を構成する各話群をどのように描き出すのか、そ

こが各本によって違うのだ。

北国合戦記事においては、①義仲自身が知略に長けていたこと②神仏による助力③北国武士の協力、の三つを勝因とし、記事を構成していた。今回は、読み本系三本に焦点を置いたが、語り本系諸本に目を向けると、③の要素はほとんど描かれず、①と②に集約されるように記事が構成されていることに気がつく。つまり、神仏の助力を得た義仲によって平家に勝利することができた描くのである。

北国合戦記事を構成する三つの要素が指摘できた。各諸本はこれらをどう描き出すかによって独自性を獲得している。成立当初の『平家物語』の姿を完全な形で復元することは困難であるが、記事を構成する要素に注目することで、ほんやりとではあるがその姿が見えてくるのではないか。その姿を想定しながら現存本を捉え直すことで諸本の流動・展開の様相を窺うことができるだらう。単なる諸本間の新旧の解明に終わらず、諸本を流動史の中に位置づけていくことが今後求められる。

注

(1) 北国合戦記事の形成に関して、その源流に同時代人の話題や在地の軍語りが深く関わっていることを指摘している論稿として、三野宗二「平家物語に於ける合戦譚成立の一考察―「俱利伽羅落」をめぐる―」

- (2) 『古典の諸相』駒沢大学国文学研究室 昭和四十四年)や砂川博『平家物語新考』(東京美術 昭和五十七年)などが挙げられる。
- (3) 松尾葦江「延慶本と長門本の編集方法」(『軍記物語論究』若草書房 平成八年)。
- (4) 引用本文は以下の通りである。
- (5) 延慶本：『校訂延慶本平家物語(七)』汲古書院 平成十八年、長門本：『長門本平家物語三』(勉誠出版 平成十七年)、源平盛衰記：『源平盛衰記(五) 中世の文学』(三弥井書店 平成十九年)。
- (6) 延慶本・長門本・盛衰記は安宅湊を渡したとあるが、覚一本では氷見の湊としている。延慶本、覚一本では、志雄に向かわせた行家軍の救援に向かう途中で湊を渡るが、地理的にはおかしい。このことはすでに多くの注釈書等で指摘されていることである(『平家物語全注釈 中巻』角川書店 昭和四十二年等)。盛衰記では、行家が志雄で平盛俊の軍勢に押されていたが、盛俊は平家の本隊が砥波山で敗走したことを知ると退却し本隊と合流したとしている。長門本では、盛俊勢が退却した旨は記述されておらず、義仲も志雄へ向かったという記述はない。
- (7) 佐々木盛綱が藤戸に渡る場面では「馬ノ草脇、鞆蓋ニ立所モ有リ」(延慶本)などと記載があり、馬具を記すことで水深がどの程度であったかがわかるようになっていいる。
- (8) 平家の人々が「鞍置馬」が渡ってきたのを見て「源氏落ナムトスルニコソ」と判断していることから、源氏の馬はぐれてきたと受け取ることができたらしい。そのことに重きを置くならば、鞍置馬を用意したのには、平家の人々の警戒心を解き馬を奪い合うようにするためであったとも解釈できるかもしれない。
- (9) 櫻井陽子氏は「延慶本と長門本で本文が異なる場合、盛衰記と類似性の高い方が、依拠本文(読み本系祖本)を踏襲している可能性が強い」と指摘している。(『平家物語の古態性をめぐる試論——大庭早馬』を例として)『平家物語本文考』汲古書院 平成二十五年)。
- (10) 砂川博氏、注1論稿に同じ。なお、『延慶本平家物語全注釈 第三末巻(七)』汲古書院 平成二十五年)では、「(長)のような位置づけ(前哨戦)の安宅合戦記事が背後に存在したことを窺わせる」と指摘している。
- (11) 注2に同じ。義仲が軍勢を手配するわけだが、延慶本では一箇所にまとまって描かれるのではなく、三箇所に亘って描かれている(表7・9・11)。
- (12) 渥美かをる氏は「木曾義仲の奇抜な作戦が眼目とされ、齋明威儀師の裏切りのために失敗した火打城合戦を除けば、平氏はすべて義仲の術中にかかり、合戦らしい合戦もせず、もろくも敗れるさまが描かれている」と指摘している。(渥美かをる『平家物語の基礎的研究』(三省堂 昭和三十七年))
- (13) なお、盛衰記には白装束の者が平家の兵らを谷底へ落ちるように先導している姿を描いている。
- (14) 願書の効用に関しては平野さつき氏による研究がある。氏は、願書を奉納し納受されたことにより「義仲は神仏の加護を受けて共に戦う立場になるのである」と指摘している。(『平家物語』の文書について(二十)―白山願書と新八幡願書―『古典遺産』三十三号 昭和五十七年十月)
- (15) 長門本と盛衰記では安宅湊を渡した後にも北国武士と平家の武士とが具体的に戦闘する場面を描いている(ただし、長門本ではこのあとに続く篠原合戦とが明確に分かれていない)。しかし、延慶本では具体的な戦闘場面が描かれていない。
- (16) 長門本では、北国合戦記事全体に亘って宮崎太郎をクロイズアップするように描かれている。例えば、砥波山合戦において義仲が軍手配を

する前に宮崎が誰をどこに配置するかまで指示している。長門本では北国武士の代表であるかのように描き出しているのである。

【付記】

本稿は、平成二十五年度國學院大學国文学会秋季大会における口頭発表を基に、加筆訂正したものです。席上、ご教示を賜った先生方に厚く御礼申し上げます。